結果誤認から始まったエコーレポート統一に向けた取り組み

◎秋山 忍[1)]、後藤 紀子[1)]
東京医科大学病院[1)]

抄録本文

【はじめに】

超音波検査レポートのフォーマットは施設ごとに決まっていて、施設内では統一されていることが前提である。今回、同一施設内にて複数のフォーマットが存在したために起こった、結果誤認事例についてその原因と改善の取り組みについて報告する

【事例】

DVT、リウマチ、蜂窩織炎、鬱滞性皮膚炎の既往歴のある 70 代の女性、呼吸苦にて救急搬送され入院となった。入院翌日に呼吸苦改善あり、下腿の難治性潰瘍精査目的に皮膚科より表在静脈エコー検査依頼。

エコーレポートから DVT の増悪が疑われ循環器内科へ DVT 精査目的にて下肢深部静脈エコー検査追加依頼。

検査前に表在静脈エコーレポート確認すると血栓増大の記載なく、静脈瘤の記載であった。

【結果誤認の要因】

エコー検査の部門が違い、レポートのフォーマットが違ったこと。シェーマに使用された色が表す意味が部門により違ったことなど複数の要因があることがわかった。

【改善策】

レポート上に使用色の凡例を表記した

使用色の統一が出来るように話し合い中

検査依頼先の統一が望ましいが、現状では不可能

【まとめ】

色の使い方だけで結果が変わってしまった事例を経験した。本来は統一した報告書を使うことが望ましいが、諸事情により難しいこともある。

統一できる部分はなるべく統一し、このような事例が起こらないように改善していきたい。